

谷浜の思い出

東京都北区 岩倉茂里

岩倉廣子（東本町五丁目出身）

毎回Jネット会員の「お元気ですか？」の記事を楽しく拝読させていただき、それぞれの故郷の思い出に、私を重ねながら七十年も昔の谷浜を回想しています。

特に八月に送られた「広報 じょうえつ No. 721」の表紙に飾られた写真はまさしく谷浜海岸であり、加齢とともに薄れる記憶を辿りながらお便りします。

私の亡父が谷浜出身であったり、家内が高田高女を出て戦後結婚するまで高田に住んでいましたので「Jネット会員」になって毎月のふるさと便りを心待ちにしています。

私が昭和九年ごろの夏休みに、はじめ弟と二人で伯父の家に泊まりながら三週間近く谷浜で過ごし、都会では味わえぬ海と山のひろびろした自然のなかで、

親元を離れて過ごした忘れられることの出来ないふるさとです。

綺麗な海の波打ち際に立ったとき、海の浜茶屋もない、もちろん写っているテトラポットなど無く、大きな日本海が、ただ広い殺風景な風景を、少しもの足らない感じでしたが二三日するとスツカリ海の子に変身して朝飯を終えるところに浜にでかけ、昼飯まで炎天下の浜辺で飽きずに弟と遊ぶ日課でした。

伯父の家にも同年輩のぐらゐの従兄弟がいて、あそび仲間にはここかきません。いつのまにか地元の子供たちと同じ様に、もぎたてのキュウリに味噌をつけてかじり、蒸かしたおやつやジャガイモに塩をつけて食べることも覚えめました。

伯父さんは私ら子供にやさしく、三食の食事も伯父さんが賄っていました。あとで判ったことですが伯父さんは海軍に

徴兵されてそこで厨房の仕事に従事して、料理に詳しく、とくにカレーはうちのカレーとは違ってルーも、薄かったが味は美味しかった。最近「海軍カレー」の味わかるお店もあるようですが一度食べくらべてみたいと思います。

唯一の交通は北陸線の谷浜駅が伯父さんの家の前にあると言うか、伯父の敷地に北陸線が通っていたので、伯父は運送店を経営していました。屋号は今と描きヤマトと呼んでいました。いまのくろねこヤマトのはしりだったかもしれません。が現在ははした屋になり孫がすんでいます。

谷浜駅は当時のローカル線の典型的な駅舎で駅前ひろばに大きな柳の木が一本あり、その下に夏場だけの小さな売店があり、カキ氷やお菓子を売っていました。上りや下り列車の、安全運転のサインの音が二階の部屋から手に取るように聞こえてきます。日本海の水平線に沈む真つ赤な夕日は、一ヶ月滞在しても滅多に見られぬ素晴らしい夕焼けで、いまでも脳裏にシツカリ焼き付いています。

浜の混雑する時は日曜日のみで、現在のようなクルマがないのでローカル線の鈍行列車が高田、長野の海水浴客を乗せてきますが、当時は浜茶屋もなく、ビーチパラソルもなく、肌の白い海水浴客で浜が賑わっていました。それも直江津海

岸、郷津海岸（虫生海岸）は料理や眺めのいい宿泊施設（前崎館？）があったので海水浴客の一部はそちらに流れていたようです。

ひと駅遠くても遠浅で、砂浜の広い谷浜は隠れた海水浴場でしたので私らは伯父さんの好意に甘え四年のあいだ、連続して毎年の夏休みを谷浜海岸で過ごし、ひとつき連れのお盆のお墓参りをすませ、土用波で海が荒れてくるころ東京へ真っ黒になって戻るのです。伯父の運送店の手伝いに、法被を着て駅舎に入入り出来たのも珍しい体験でしたし、荷物の配達で、有間川の奥の正善寺、横山、桑取へも何回か自転車で配達した経験があります。現在「桑取湯つたり村」の立派な施設になっているのを見て驚きました。お盆になると駅前の火の見櫓のあかりの下で村の盆踊りの催しも懐かしく思います。家内の実家、親戚が健在でいますので第二のふるさととして東京から望郷の想いを綴らせてもらいました。

